

2026 年 9 月 13 日（聖霊降臨後第 16 主日、A 年特定 19）

メッセージ

「私がお前を憐れんでやったように」

（マタイによる福音書18: 21－35）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音は、「きょうだいを得る」ことについて語った先週の福音に続きます。テーマは「赦し」です。きょうだいを赦すことは、きょうだいを得ることだと語られています。

ペトロは福音の冒頭で主イエスに、「何回赦すべきでしょうか」と尋ねます。赦す回数を問うペトロにとって、赦しとは自分が受けた損害を我慢することです。つまり彼の問いは、「何回我慢すればよいですか」という意味でした。もし赦しが我慢なら、いつか限界に達し、我慢できなくなってきょうだいを失います。これは、わたしたちの常識にもよく見られる姿勢です。しかし今日の福音は、本当の損失とは地位や名誉やお金を失うことではなく、きょうだいを失うことだと語ります。だから主イエスは、「七回どころか七の七十倍までも赦しなさい」、つまり限りなく赦しなさいと教えます。

主イエスが問題にしているのは回数ではなく、赦さない心です。「ここまでは赦してやる」と限界を設けると、わたしたちはすでに赦す心から離れ、赦さない心に支配されています。主イエスが求めるのは、赦さない心ではなく、赦す心です。きょうだいを得て、神の家族としての交わりを保つために、わたしたちには赦す心が必要です。しかし、その心を自分の力だけで持ち続けることには、どうしても限界があります。それゆえ、神ご自身がわたしたちの赦しの源となってくださいます。今日のたとえで、一万タラント（約六千万日分の賃金に相当し、日当を一万円として換算すると、約六千億円とも換算される額）もの負債を抱えた家来を主君が赦したように、神がまずわたしたちを赦してくださいます。

その赦しを受けるからこそ、わたしたちにも赦す心が与えられるのです。心から赦せる人とは、深く憐れみ、赦してくださる神に出会った人です。

神がまずわたしたちを憐れみ、赦してくださっていることは、主イエスの十字架によって示されました。主イエスはご自分の命を献げ、わたしたちの命がそれほどまでに尊いことを示してくださいました。御子の命を惜しまないほど、神の憐れみは大きいのです。主がこれほどわたしたちを赦し、憐れんでくださるからこそ、わたしたちも神に倣い、互いに赦し合い、赦しと和解の関係を築けます。「私がお前を憐れんでやったように、お前も仲間を憐れんでやるべきではなかったか」。この主君の言葉を忘れずにいたいと思います。わたしたちを深く憐れみ、赦す神は、神の家族として互いに赦し合う共同体へ、わたしたちを招いています。